

聖書:ルカの福音書15章11~24節

説教:駆け寄る神

はじめに

今日の所は、聖書を読んだことがある方であればどこかで一度は聞いたことのある有名なたとえ話です。また初めて読む方にとっても、よくテレビドラマや映画にありそうな筋立てですから、改めて説明する必要がないくらいわかりやすい。親不孝なドラ息子(1)が放蕩の限りを尽くしてすっからかんになったとき、それまでしてきた数々の悪行を悔い改めて父親の元に帰って行くと、ずっと息子(2)のことを心配していた父親が息子を赦して家に迎え入れた。これがこのお話のすべて。実にわかりやすい。

しかし、ほんとうにそうでしょうか。いつも言いますが、私は性格がねじ曲がっているせいなのでしょうか、単純でわかりやすいと思っているところに何か落とし穴が仕掛けられていて、実は思っていた以上に深い内容があるのではないかと疑ってしまうのです。今日は、こうに違いないという思い込みを一度わきに置いて、まっさらな気持ちでイエスが語っていることに耳を傾けてみたいと思います。

1 父

1) 財産分与を要求される

ここに登場する二人のうち、まず父親のほうを見ます。12節。「弟のほう(3)が父に、『お父さん、財産のうち私がいただく分を下さい』と言った。それで、父は財産を二人に分けてやった。」

聖書の時代、まだ元気な父親に向かって財産を分けてくれ要求することは、「お父さん、早く死んでください」と言うのと同じくらい非常識なことだったと言われます。ですから息子がこんなことを言った途端、「お前なんか今日から勘当だ。家から出て行け」と怒鳴って追い出してあたりまえ。それなのに、息子の言いなりになって財産を分けてあげるとは、いったいこの父親、何を考えているのか。ちょっと頭をかしげたくになります。

2) かわいそうに思い、駆け寄る

もらった財産を手にした息子がこの先どうなるか、どんなに愚かな父親だってわかるはず。親不孝な態度は今に始まったわけではないのです。お決まりのコースで、息子は全財産を使い果たしスッカカン(4)になって家に戻ってきた。こんなとき父親はど

うするでしょう。さすがの堪忍袋の緒が切れて、「どの面下げて帰って来たんだ」と怒鳴って追い返すかもしれません。あるいは日本の文化であれば、母親が泣きながら出てきて、「お父さんによく謝りなさい」と言って、とりなしをする。そんな場面を思い浮かべます。いずれにしても、すんなりとおさまるとも思えません。

では、この父親はどうしたか。20節後半。「まだ家までは遠かったのに、父親は彼を見つけて、かわいそうに思い、駆け寄って彼の首を抱き、口づけした。」そうして盛大な宴会を開く。みなさん、どう思いますか。「どこまでこの父親はお人好しなのか。こんなことをしているから、こんな愚かな息子に育ったのだ。息子も息子なら親も親。」そんなふう(5)に言われそうです。

2 弟息子

1) 帰ろうとした動機

父親のことは一旦ここまでにして、次に息子のほうですが、財産を使い果たして食うことさえ事欠いてしまったとき、彼は何を考えたのか。そこに注目します。17~19節。「しかし、彼は我に返って言った。『父のところには、パンのあり余っている雇い人が、なんと大勢いることか。それなのに、私はここで飢え死にしようとしている。立って、父のところに行こう。そしてこう言おう。「お父さん。私は天に対して罪を犯し、あなたの前に罪ある者です。もう、息子と呼ばれる資格はありません。雇い人の一人にしてください。』』」

「彼は我に返って」とあります。このたとえ話を理解する大切な鍵となる言葉です。今まで頭がぼんやりして見えていなかったのが、ある瞬間ぱっと視界が開けるようにして現実を理解する。「我に返る」とはそんな意味。それで皆さんは、息子はここで悔い改めた、と思ったのではないのでしょうか。「私は天に対して罪を犯しました。」もうこれははりっぱな信仰告白ですから、なおさらです。

しかしよく考えてください。この息子が父のところ(6)に帰ろうと思った動機はなんであつたか。聖書にこう書いてある。「父のところには、パンのあり余っている雇い人が、なんと大勢いることか。それなのに、私はここで飢え死にしようとしている。」あそこに戻ればパンが食べられる。これが本当の動機です。心を入れ替えたからではありません。

ません。食べるものに事欠くようになると、どうしたら食べ物にありつけるか。それだけ必死になって考える。お腹がいっぱいになるのなら少々の嘘でも芝居でもなんでもする。そこまでのものなのです。それに加えてこの息子は、まだ元気で働いている父親に向かって財産をよこせと言ってはばからない、そういう人です。そんな人が、腹が減ったくらいで、「私はお父さんに悪いことをしました」と謝ると思いますか。

ここで皆さんは反論するでしょう。「でも、この息子は、お父さん、私は天に対して罪を犯しました」としおらしく言っているのではないか。それはどうなのか。」私はあまり人を疑いたくはないのですが、この息子に限って言えば、そうとう用心しがかかった方がよい。18, 19節は、悔い改めたふりをしているだけ、です。では、どうしてこんな芝居じみたことをするのか。いまだけ楽しければそれでよくて、何も考えない息子ですが、こういうところは頭が回る。このまま父親が自分を受け入れてくれるとは、さすがに彼も思っていない。そこで、父親が泣いて喜ぶようなセリフを言えば、父親はコロッとだまされて、赦してくれるだろう。それで思いついたのがこのセリフです。赦してもらえかどうかの決めセリフですから、しくじらないように、なんども練習をして本番に臨みます。さて結果はどうなったか。用意してきたセリフをきちんと語り、家にも無事に帰ることができました。芝居は大成功に見えました。

2) 駆け寄ってきた父に抱かれる

でも、イエスが父親をだますようなたとえ話をすることはありませんから、そんなはずはない。この流れをよく見てみましょう。この息子が父親に言葉を語ったのはいつだったのか。息子は父親を見た瞬間、さあ準備してきたセリフを言おうと待ち構えた。ところが、父親は遠くから彼を見つけるとかわいそうに思い、駆け寄って首を抱いて口づけして、息子がなにかを語る暇を与えない。

イエスの時代、父親がなりふり構わずに息子のほうに駆け寄るようなことは、あり得なかったと言われます。このようにふるまう父親の姿を見て、息子は冷静でいられたのでしょうか。二つの意見があるでしょう。一つ目。息子は冷静だったという意見です。というのは、21節でこう言っている。「お父さん。私は天に対して罪を犯し、あなたの前に罪ある者です。もう、息子と呼ばれる資格はありません。」これは、用意してきたセリフそのもの。だから冷静でいられたに違いない。

もう一つの意見はそれと反対です。息子は父親の姿を見て、何か大きな変化が起きたのではないか。というのは、父親は自分が帰って来たことを喜んでいてのです。すでに受け入れられているのがわかったのですから、もし冷静であったなら、自分が用意してきたセリフを言う必要はない。ところが21節のような罪の告白をするのです。息子は用意してきたセリフを芝居をするようにして言ったのではありません。父の姿を見て、自分のしてきた罪がいかにひどいものであったのかを知らされ、本心から告白した。父の姿が、この息子を悔い改めに導いた。それがこのたとえ話が語っていることです。

3 神

1) 罪人が帰るのを待ち続ける

ここまでことをまとめましょう。この息子が悔い改めに導かれたのは、最初に思っていた17節の時点ではありません。21節の時点でした。意外なことを聞いて驚いたかもしれません。

でも、自分のことを振り返ってみてください。なにか困ったことが起きたからと言って、すぐに悔い改めてきましたか。そうではなかったはず。他人のことより自分のことを言った方が早い。クリスチャンになる前、妻との間に問題が起きても、ごまかしたり時には嘘をついたり、「これからよい夫になるから」と言ってその場を取り繕ったり、そんなことを繰り返してきました。そんな私ですから、この放蕩息子がいかに悪賢くて悔い改めようとしないうか、手に取るようによくわかる。

神はどうされるのでしょうか。どこまでもねじ曲がって素直になれない罪人をご覧になり、あきれ果ててしまうのか。もう家には入れないと怒鳴って追いつ返すのか。そうではない。この父親は神の姿を現しています。罪人が家に戻ってくるのを、遠くを見やりながら毎日待ち続けます。息子のほうは、父親をだまして家に潜り込もうとひどいことを考えています。父親はそんなことは百も承知なのに、息子にだまされてるかのような愚かな姿をとり、かわいそうに思って駆け寄ってくださり、息子が帰って来たことを喜ぶ。これが神なのです。

2) かわいそうに思う

ところで、父親はどうして息子に駆け寄ったのでしょうか。「わいそうに思った」からと書いてあります。このことばは、はらわたがちぎれそうになるくらい悲しい、そんな意味だと言われます。私たちがときどき「かわいそうだね」と口にしますが、

そんなレベルではない。いても立ってもいられない。なりふり構わず、人から笑われようがなんと言おうがそんなことはどうでもよい。とにかく息子のところに一刻でも早く駆け寄って、抱き留めてやりたい。それが神の愛なのです。

15章10節にこうありました。「あなたがたに言います。それと同じように、一人の罪人が悔い改めるなら、神の御使いたちの前には喜びがあるのです。」これを読んで、誰もが「悔い改めなければ」と思うでしょう。でも、それが簡単にできるのなら誰も悩みません。いったい人はどうやって悔い改めるのでしょうか。やっぱり努力でしょうか。今日のところから教えられます。息子は努力したか。いいえ。自然に口から出てきた。それはもう父をだまそうと用意していた芝居のセリフではありません。まるで泉のように心の底から湧いてくるように罪の告白が口からこぼれてきた。神が、こんな汚い自分を喜んで抱いて迎えてくれる。父である神のほうから、思いもかけなかった深い愛を示してくださったときにそれが起きました。

私たちは安心してまた神の所へと立ち戻り、この方から罪の赦しをいただきたいと願います。